蘇芳集

雨滴

髙橋さえ子

早蕨や宇治十帖の話など

かんばせに雨滴八十八夜かな

新蓮根育む雨となりにけり

竹皮を脱ぐ筑波嶺が見たくなる

一片を解きて水の香白菖蒲

橋床の真中ふくらむ青嵐

ひとつぶの雨が頬打つ夏越かな

四万六千日

青山丈

青柿の落ちて平らをころがりぬ

わたくしは四万六千日に居る

その角のこの道からの夏祓

人中を行く盆僧の速きこと

盆の雨池のすみずみまで降りぬ

簡単な日記を書いて梅雨深し

落蝉の一つ見るこの二三日

石畳

清水裕子

道なりに歩むは気楽黄たんぽぽ
牡丹見に昨夜の湿りの石畳
記憶の糸紐解くやうに牡丹咲く
寛ぎの刻すぎ易し水中花
地震後の地よ紅椿白椿
崖の崩れむばかり風死して
桜の実ぷつぷつ踏みて坂ひとつ

老鶯

真保喜代子

あぢさゐの終りは淋し昼の雨
老鶯のこゑのつづきを待つ静寂
夾竹桃いちにち暑くなる気配
幼児の身に余りをる浮袋
夏至の日や大海へ入る河の色
夕風に海の匂へる月見草
百合ひらく今日一日の健やかに

花菖蒲

冨田正吉

老人が椅子に並んで菖蒲園
黄菖蒲に待たるごとし待つごとし
菖蒲田に湯浴みのやうな時間かな
花菖蒲空の蒼さを呼ぶごとし
なにはともあれこの人と枇杷をむく
浅草が好きで樟脳舟が好き
いつまでも海の日暮や多佳子の忌

潮騒

長沼三津夫

潮騒の団地晩夏の海鳴れる
霊山の滴りはげし岩ぶすま
霊山の滝水に手を合はせけり
庭石に一つぶのまづ喜雨激し
音のやや遅れてひらく遠花火
父の日の海の荒れをり国境
父の日の澄みきつて沖晴るるなり

「熱中症注意」

野路斉子

七階の窓にようこそ蝉が来て
蝉が好きその鳴く頃に生れもして
みんみんと鳴けば応へて森の樹々
大夏木ただ真つ直ぐと云ふだけの
場違ひの赤さを夏の紅葉てふ
雀にも告げて「熱中症注意」
胸張れば蟻とて今日を生きるもの

百合白し

前田陶代子

六月の滝音白をつらぬけり
雨容れて男滝の音の勢ひ立ち
傘を打つ雨音せつに柚子の花
でで虫や音無し川に水音して
万緑を来て人ごゑに躓づきぬ
まくなぎを払ひて熱き掌
持ち合はす言葉無かりし百合白し

初蝉

宮尾直美

花合歓の峠越えゆく遍路鈴
山を売る話立ち消え時鳥
脱藩の径てふ標白雨かな
初蝉や五十年忌の父の墓
父の忌の貝風鈴の鳴りやまず
晩年は俳句三昧ところてん
なりはひに暇ありけり梅雨の月

桔梗

八木下末黒

母あらば九十二齢枇杷そなふ
毒だみや踏み場なくなる墓一つ
雀雀すずめにぎやか夏至の朝
凌霄花の落ちてさはさは竹箒
老木の椎と山門五月闇
青楓仁王の膚のうす埃
菜園の野菜のほかの桔梗かな